

ACRYLART

SPECIAL ISSUE / アクリラート展

VOL. 7



Naofumi Hattori, Junko Nakazawa, Yutaka Furuta, Sachiko Yuzawa, Masahito Katayama, Yositomo Kasiwai, Hiroyo Utsumi, Yasuyuki Tatebayashi, Risa Imai, Yuko Kuroda, Yasusi Yamabe, Kenichi Toumoto, Ayako Suedomi, Kazuya Hasimoto, Akiko Kanayama, Yasuo Morita, Tadaharu Okubo, Rikuo Ueda, Kou Kasiwagi, Kei Takanasi, 20 Artists of ACRYLART exhibition.

アクリラート展 6/18㈯～6/29㈰ ● 美術館(東京都品川区大崎／木曜日休館) ● 主催: ホルベイン工業株式会社 ● 後援: ハイネケンビール



転換期にある画家たちのエネルギー

形式を問う作品に出会える
楽しさ。
宇佐美圭司(実行委員)

宇佐美圭司（実行委員）

新しい作家たちのかつて作家の表現は、メチ工を作ることから始まりました。色材、支持体といった素材づくりから制作に至る全営為が〈作家の表現〉でした、しかし、十八世紀末に起こった産業革命は作家の中についた表現者と素材製造者との分離させました。以降、多くの作家はメーカーといふ他者から素材を求めて制作に打ち込み、メーカーは作家に素材を提供するために知識と最新の技術力を注いで良質の製品を開発してきました。

めに な新しい色材を生みだしてきました。アクリラもそのひとつです。この色材は生まれてまだ三十数年がたつたにすぎませんが、新しい絵具として作家たちに用いられ、多くの優れた作品を世に送りだしています。今回開催するアクリラート展は、そのアクリラを用いて意欲的な表現活動を続けている若い作家たちによる作品展です。弊社は一九八六年からアクリラ奨学制度（ホルベイン・スカラシップ）を設け、将来性のある作家の制作活動を援助するとともに、作家との交流を通じて表現の可能性を広げる新しい色材の開発と品質の向上に努めてきました。アクリラート展は、その成果のひとつであるといえましょう。

今、表現しなければならないのは作家たちだけではありません。表現者と素材製造者とが分離したことにより、あたかも表現する主体は作家であり素材づくりは表現行為になりえない、と当然のように考えられてきました。しかし、素材と表現行為は不可分のものです。かつての作家たちの営為はそのことを明らかにしています。そして、今の若い作家たちの多くがメチエや支持体にこだわり、真摯に新しい表現の可能性を追求している姿はそれに重なっていきます。作家たちは表現行為と素材との距離が掛け離れてしまっていることにいらだち、表現と素材、自分の中の表現者と素材製造者との融合を必死に図るとしています。

今後、メーカーは作家との交流を今以上に緊密にして、素材の新しい表現の可能性の追求を続けていく責務があります。言葉を変えて言えば、それはメーカーが「素材の表現者」になること――ではないでしょうか。それによって表現行為と素材との乖離が避けられ、メーカーと作家がともに切磋琢磨してより高次の新しい表現に向かうことができる、と考えます。ホルベイン・スカラシップとアクリラート展が、そのための作家とメーカーが表現の可能性と未知を追求する共同の実験場になれば幸いです。

ホルベイン・スカラシップの第一回奨学者から送られてきた作品写真数点が、それぞれ一枚のボードに貼られ、私たち（野見山暁治・池田龍雄・谷川晃一・宇佐美圭司）の前に並べられた。その中から展覧会のために二十人を選考しなければならない。

千人余りのスカラシップ応募者から百人の奨学者が選ばれ、そこから二十人ということになれば五十倍をこす倍率ということになろう。選考にあたった四人の画家はそれぞれ作風も違い、考え方も違っているけれども、応募者よりも何十年か先輩として作家活動の修羅場をふみ越えてきており、また違ひはあっても皆それぞれ表現者としての主張を持っていることに

おいて共通している。そんな信頼感が無言のうちに働いたからであろう。選考は二時間ほどでスムーズに終了した。

もちろん正解が出たというのではない。そんなどことは不可能なことなのだ。だから私はなにはさておき、はじめに選考にもれた人たちに赦しをこわなければならないと思う。カラーワークによる選考であるから、写真の大小、その写真の良し悪しによって、作品の感じが大きく左右されてしまう。選考は私たちの能力のつなさに写真メディアの力が相乗し、かたよった決定に至ったというべきであろう。選考が結果として、多くの才能や努力を切り捨てたことを思わずにはいられない。しかし、それはどのようない選考においてもある程度は避けられないリスクであり、今は選ばれた若い画家たちが一つのチャンスを生かして全力投球してくれることを願う以外はない。

この展覧会は五十号とか百号とかの大きさを指定し、実際の作品を公募して審査されたものではなく、美術者の日常活動（個展など）の写真によって選ばれたものである。だから展覧会は写真選考という欠点はあるが、その反面規格サイズとは無縁でありむしろ表現の形式を問う、といった作品に出会える楽しみがある。実際、半数近くの選ばれた人たちが、既成の絵画の形式からみ出場で表現活動を展開しており、それが十全とはいわぬまでも展覧会場に反映されているのであるまい。

形式を問うことそのことがすぐれた表現を生むとはかぎらないが、形式を問うというエーネルギー

一を喪失しては転換期にある今日の現代美術は成立しない。形式を問うことが避けがたいのは、美術よりもより総合的な命題である、生そのものがその存立形式を問われているからであろう。絵画の形式といつても、その作品が売れるというようなシチュエーションからほど遠くにいる一人の若い画家の表現現場では、それは表現の支持体を問うという意識に変化する場合が多い。五十号、百号といった文字通りの形式的な枠組から離れ、画家たちは太古のアルタミラの洞窟やサハラの乾いた岩板へと夢を馳せる。もちろん、何に描いてはいけないというような制約はない。そして、それはどのように展示しなければならないという約束もありはしない。表現に可能性を与えると考えられるなら、あらゆる試みが企てられてしかるべきなのだ。

伝統が顧みられる理由の一つは、過去の遺産こそが私たちにじかにふれることの出来る異なる形式を暗示するからであろう。支持体について考えはじめる作家の多くは、表現の未来を志向しながら「人間の伝統」と呼びえるものに行きつくのである。それが転換期の重要なエネルギーとなりえるのは、表現の最初の一歩を踏み出す生々しさが、支持体を選ぶ行為によつて回復されるからであろう。

表現の可能性はしかし、形式を問う試みの中にだけあるのではもちろんない。当然なことに、そしてやっかいなことに、あらゆる既成の支持体の試みは、任意の一つの支持体の上に写像しなおすことが可能である。五十号、百号といったキヤンバスの枠組みが、あらゆる表現の支持体と対等である循環が避けがたく私たちを訪れるのである。

この展覧会は今日の現代美術のそのような状況の一つの侧面を現わすことになるであろう。二十人の作家には各自六・七mの壁面とその付近が展示スペースとして与えられたという。めんどうな取り扱いや展示の労を惜しまなかつた、主催者の努力に敬意を表したい。そして第二回、第三回とアクリラ奨学制度とアクリラート展が、益々充実したものになつていくことを願つてゐる。





福部直文／雨がしみる 120×80cm 和紙 シルクスクリーン 水彩
パステル アクリラ



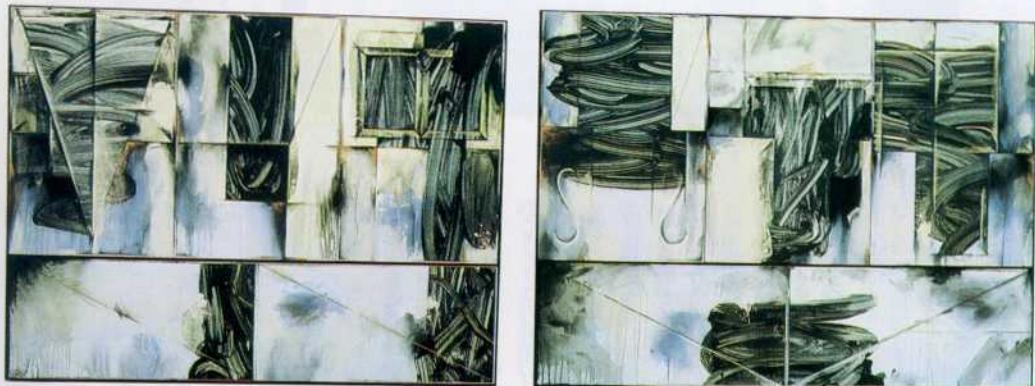
中澤純子／偏西風 130.3×194 cm キャンバスにアクリラ



古田裕／古田裕 188×298×10 cm ALC板 アクリラ



湯沢幸子／METAMORPHOSE「犬」 220×162 cm 既テン
ペラ・水彩・油彩・木・エチレンボード・グラスファイバー
鉄粉・真鍮・キャンバス・アクリラ



片山雅史／風のなる日のために '87-VII-A・'87-VII-B
124×161 cm・124×161 cm キャンバス・油性インク・顔料・アクリラ



柏井良友／HELLA&HERA 194×162cm 織布にアクリラ

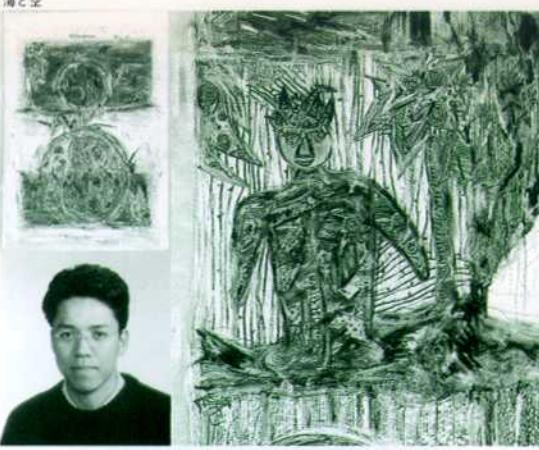
ACRYLART



EXHIBITION

幅フメートルの壁面とその周りの空間が、一人一人の作家に与えられた。作家の表現はいとも簡単に絵画の形式を越えてしまう。そして、新しい空間と表現の未知へと向かうアクリラを自在に使って、二十人の作家が新しい色と造形と空間の創出に挑みます。

おたり 士にしみ来たてしていく 全て回り回ってい
るんだと実感します。すこく気分よくなります。少
しオーバーに言えば、熱帯の原生林とこの雨は、つ
ながっているのです。そして、あと何年もすれば、
この雨も降らなくなるのかもしれません。目先のル
ールにしばられて、大きなルールを見失う。今に大き
きなバチがドカンと当たるでしょう。そんなことを
想いながら絵をかいています。

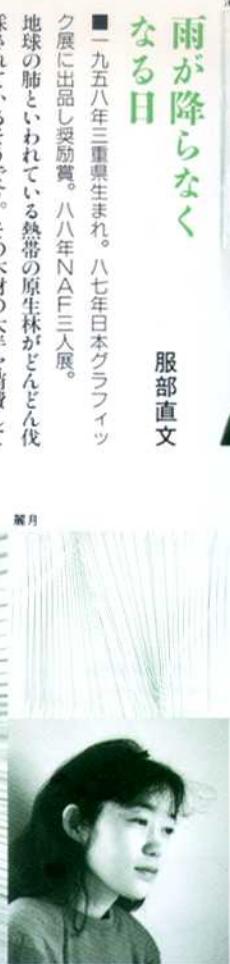


雨がしみる

美しい絵画

中澤純子

■一九五九年浦和市生まれ。現代日本美術展、エンバ賞美術展などに入選。銀座コバヤシ画廊、スペース遊他で個展、神奈川県民ホール、ハビタギャラリー他でグループ展。



假面歌

走査する風景から

古田
裕

絵画が、例えばスクリーンとして、意味という堆積物の洲を形づくつていき成長するのではなく、紡ぎ出された色や形が折り重なった量としてでなく、要素の素顔を奏でることに用いていきたい。



■一九五八年三重県生まれ。八七年日本グラフィック展に出品し奨励賞。八八年NAE三人展。

■一九五八年三重県生まれ。八七年日本グラフィック展に出品し奨励賞。八八年NAF三人展。

A close-up photograph showing a dense stack of many thin, light-colored paper strips, likely from a book or document. The strips are arranged in a slightly overlapping, parallel fashion, creating a textured, layered effect. The lighting highlights the edges of the strips, emphasizing their thickness and the overall volume of the stack.

A black and white portrait of Etsuko Yamada, a woman with dark hair, looking slightly to her left. The background is a plain, light-colored wall.

絵画が、例えばスクリーンとして、意味という堆積物の洲を形づくつていき成長するのでなく、紡ぎ出された色や形が折り重なった量としてでなく、要素の素顔を奏でることに用いていきたい。

■一九五九年滋賀県生まれ。八五年ARTISTS BOOK : JAPAN (東京／ニューヨーク) に出品。八七年ギャラリーOで橋田尚之との二人展・描かれた空間と構築的な平面。八七年、八八年ルナミ(画廊)にて個展。

古田 裕

中央に結集し、また、等距離を保持したまま同方面へ円運動を繰り返していたことを忘れたかのように風景は、私達のまわりで流動質から均質に透きとおるものとなり、次第に、四角い内壁を飲み込みはじめ

ガソリンを入れていた時期がありました。ショートコースする個所がわからず、ヒューズを取り替えながら走る毎日でした。信号もなく車を止めたこともない場所で、ヒューズをかえるために速度を落としてゆくいつも五、六km/hで通り抜ける時に見える風景が、五、六km/hで安全運転で通るために必要な情報で、知らぬ間に、私は歩行者の持つ風景の他に、自転車・バイク・自動車を運転するための情報として

て風景を読むはめになってしまっていました。

目撃した事故や火事などを、テレビや新聞などで、日常風景の内で再認識しなおすことなどもあり、また逆にテレビで見たことをあたかも現場で見たかのように会話したりする。

空気の動き、温度、湿度などもなんでもビジュアル化される今日。時間、距離、風景はどんどん変質し、ブラウン管に閉まれた、本質から遠い記号が走査する風景が日常風景としてある。そのような風景の変質に対し視ることの変質も望まれる。そして、また廃墟や生物や絵も風景としてある。(ACRYLART・VOL.5より抜粋)

変容をおこす装置 湯沢幸子

■一九六五年東京都生まれ。八五年GARAPAGOSS、八六年大谷地下美術展'86他に出品。八七年ギヤラリー・パレゴンII、かねこ・あーとGにて個展METAMORPHOSE、大谷地下美術展'87、メタルフォーション展に出品。八八年THE 19TH GRADUATE WORKS EX.に出品。

都会の空気は、何やら人を覚醒させる作用をもつてゐるようだ。都会がいい。都市は単にそこに住まう人間の生活空間というより、人に見つめられる風景だ。

また、人が都市を見つめるばかりでなく、人は、都市によつて見つめられもする。こうして視覚、見るこの感覚そのものを変容させられる。コンクリートがうちはなされたままの建築の壁に、ここちよい、荒夢としたものを感じる。乾きと同時にしめり氣も感する。対極の要素が、混在し、しかも矛盾を感じさせない。矛盾さえも消費してしまう——そんな感覚の変容。あるいは、鉄、ガラス、アルミでもいい。

無機的な都市の造形に見つめられることで、人の感覚は、確実に変容を遂げている。

今、感覚の変容を語るのは、様々な切り口が可能だろうし、現在を生きている人には多かれ少なかれ共時的なことだ。私は、作品の制作という現場で、それには気づいた。

絵画を窓にたとえるのはうまい方法だ。空気の流れがある。内と外を貫いて、ものの背後にあるみえない実体との交感がおきている場。絵画作品は、思考をはじめさせる発起装置であると思う。思考をはじめに氣づいた。

める——これは内部に穴があきはじめるということだ。絵画作品の重要な性質は、それ自体の中にあるといふよりは、むしろ、作品が人間に要求する試練の中であり、現実に接近していく機会に作品がなるという点にある。つまり、絵画作品というのは、観る人の感性にゆさぶりをかけ、内部のより奥深いところに変容をおこす装置ではないか。

一方、作り手も、制作の現場を通して変容していく。真白なギャンバスを前にした時、海岸で地平線をみつめる時、森の中、砂丘、地下空間、様々な環境の変化によって、導かれるものは千変万化する。自分をとりまく場がらうけどるもの、それは予期されぬ“素敵”なのだ。

僕は、まず、黒の油性絵具を使って、内面の表現意欲を瞬間に爆発させたかの様に暴力的なストロークを無作為に描きます。原始的な造形衝動を「風」のイメージに託して。その「風」をシャープな区画で分割し、ストロークを封じ込め、画面の中に緊張と秩序を創り、同時に、絵具をたらし、顔料をすり込み、描きます。

描く行為にこだわって表現をくり返し、手の痕跡を残し……。より人間的でありたいと思う気持ちが、今では人間的ではないやさしさと硬さにふれようとしている気がします。きっとそこに永遠なものが見つかるかもしれない信じて……。

僕は、まず、黒の油性絵具を使って、内面の表現意欲を瞬間に爆発させたかの様に暴力的なストロークを無作為に描きます。原始的な造形衝動を「風」のイメージに託して。その「風」をシャープな区画で分割し、ストロークを封じ込め、画面の中に緊張と秩序を創り、同時に、絵具をたらし、顔料をすり込み、描きます。

描く行為にこだわって表現をくり返し、手の痕跡を残し……。より人間的でありたいと思う気持ちが、今では人間的ではないやさしさと硬さにふれようとしている気がします。きっとそこに永遠なものが見つかるかもしれない信じて……。

人間的でないやさしさと硬さにふれる

片山雅史



METAMORPHOSE「大」

片仮名まじりの日本語

柏井良友

■一九五〇年高知県生まれ。JUNZO'88、絵画・美術力としての愛、Impact Art Festival他に出品。個展Method of Tears, Tear Bomb, Hella & Hera。

白い矩形は、夥しい歴史の記憶を宿しているようで、際限もなく続く喧嘩りに、うんざりさせられたりもする。そこで私が、何をしようが言うことも聞いてくれずに、ちょっと顔をしかめて、お小言を言う。そんな平面上に何か置いてみたとすると、発生してくれるのは、私の個人的事情もさることながら、びたりと寄り添う造形のからめ手だ。「好きになれない」とほつたらかせば、造形は足踏みをして待つていてくれるだけで、一向に、その考えを改めようとしない。

そこで私は、付合いで考へる。一般に絵画は、形と色彩で成り立っているが、その関係は並列なものではないようだ。形がつけられて色彩が塗られる、という関係ではうまくゆきそうもなく、いろが自立していつてかたちになってしまふ、という付合いで必要だなと思われる。これは、常に遠元的な空間の問題に晒されるやつかない羽目になるのだが。私は、アルミサッシの室内をエアコンで乾燥させても歐米の人とは違う乾き方をしているはずだ。ここにもたらされた平面のお喋りが、妙に片仮名まじりの日本語だつたりするのもおかしいが、ことさら伝統を云々するよりは、そのまんま、單語の組み方をずらしたり、はすしたりして出てくる会話を、今し

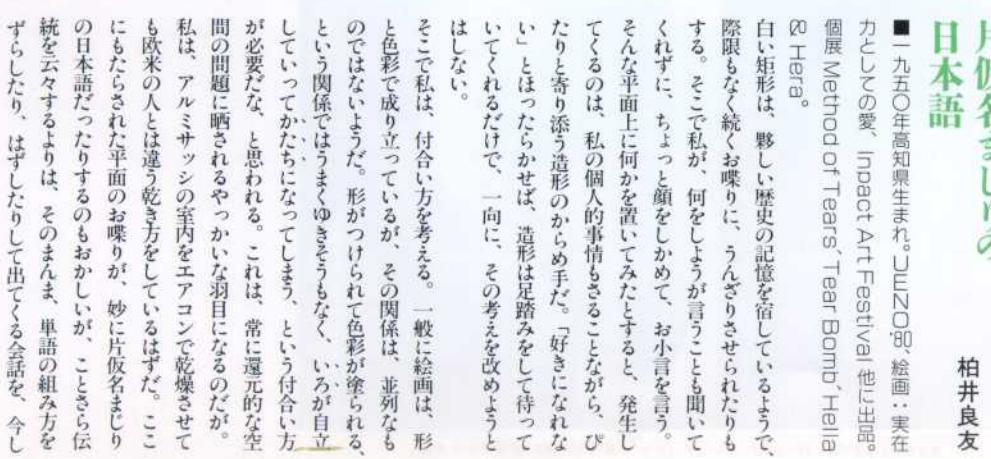
ての生命において必要な不可欠で、時として限りなく暴力的に、そしてまた限りなくやさしく、それすべてを包み込んでしまいます。

そういう「風」という自然のリズムに、刹那的な存在である自己の呼吸を同化させ、永遠なもの、普遍的なものに近づけたら、と思つています。

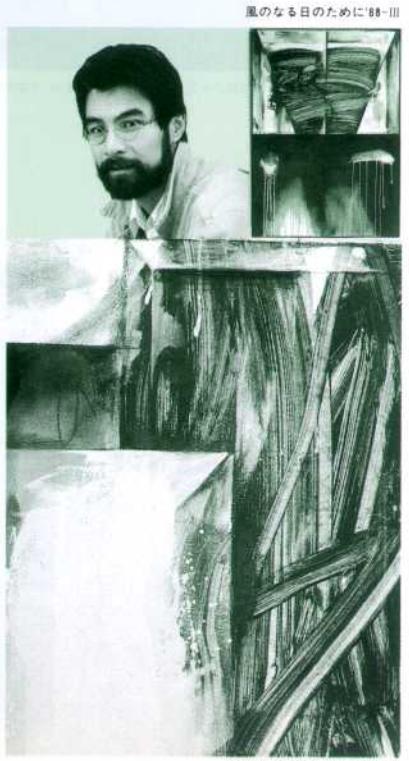
風のなる日のために'88-III



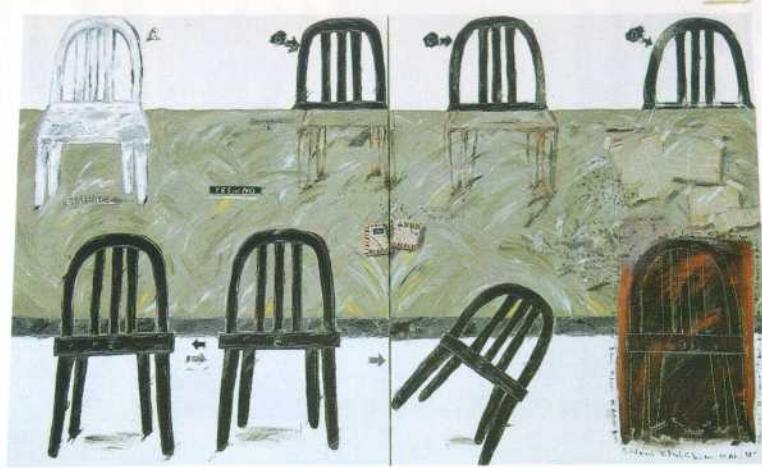
Hella & Hera



風のなる日のために'87-VI-B



風のなる日のために'88-III



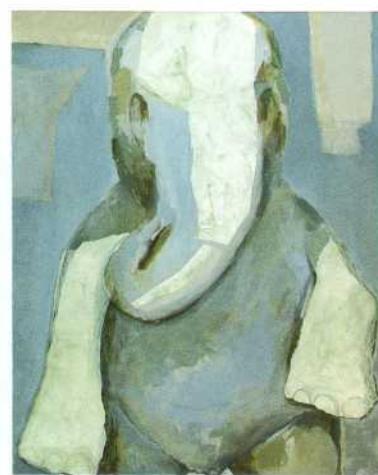
内海浩代／「伝達へのプロセス」'88 182.1×260.5cm 新聞 アクリラ



今井里砂／一足お先に…。 183×78 cm ベニヤにアクリラ



館林康行／私の部屋からは美しい夕焼けが見える 80×82 cm 木材にアクリラ



黒田悠子／有象無象 227.3×181.1cm・227.3×181.1cm キャンバス 布 アクリラ 木炭



山部泰司／踊る力 210×390cm キャンバスにアクリラ



塔本賢一／生命は一つの源から発している 280×280×245cm 木 粘土(テラコッタ・紙粘土) 木炭 コンテ 紙 ガラス ラジオカセット スピーカー 鐘の脱け盤・羽 キャンバス 油彩 アクリラ



末富綾子／晩夏(バカンス) 162.1×280.6cm キャンバス 鉛筆 アクリラ

酒場で当地の男が踊るのを見て喜んで拍手をすると、いきなり踊っていた男にならざるシーンが有る。

アメリカ人はわけが分らず抗議すると、英語がしゃべれる男が「ギリシヤでは男はブシユケ(魂)の安らぎを求めて自分のために踊るのだ。だから拍手なんかされて見せ物になってしまったことが悔しく悲しいのだ」と説明する。印象に残る場面だ。このセリフは何やら「なぜ描くのか」という間の答えになつてはいないだろうか。また、これも最近氏質をとられた真下氏の言葉に「詩を書くことは自分の生き方を再確認する作業として位置づけたい」というのが有つた。「描くことで何を表現するのか」という間の答えにはならないだろうか。これらのリアリティーにあふれた言葉に対し「私のコンセプトは『この作品のコンセプトは』などと言つても虚しい響きとなつて自分にかえつくるような気がする今日この頃です。

絵画のために

山部泰司

■一九五八年岡山県生まれ。八二年フジヤマゲイシヤ展、八二年～八七年イエス・アート展、八六年アート・ナウ、八七年花の表現などに出品。



説く力

私的宇宙創生譚

塔本賢一

■一九四三年熊本県生まれ。宇部ビエンナーレ、現代日本美術展、現代版画コンクール、安井賞展、ABD OSP一展、エンバ賞美術展、日本国際美術展、京展などに出品。毎年、個展。

「生命はひとつ源から発している」——これが私

の数年来の制作モチーフです。原子が結合してできる分子は、物質の特性を持つ最小の単位です。生物

無生物を構成する物質は一千万種類にものぼるそ

ですが、その大部分は分子が集合して組立てられたものです。又、量子論的な虚数時間で生まれる宇宙の天体も、その中でひととき生活する私達も、もちろん結合された集合体で組み立てられています。私

は可変的にかづりズミカルに花の過剰な力とかかわりながら自分でも、はじめて見るような新しい絵画を創造しよう。見られるたびにより美しい語られるたびにより透明になってゆく、風通しのよい絵画。

Helives in comfort



生命は一つの源から発している

かぶと虫のいる場所

末富綾子

■一九六三年山口県生まれ。八五年、八六年国展に出品。八六年武蔵野美術大学卒業制作優秀賞・三雲祥之助賞、同年上野の森美術館大賞展、同秀作展、BAAKJ展に出品。八七年銀座スルガ台画廊にて個展レスボアール展、セントラル油絵大賞展ほかに出品。

「晩夏(バカンス)」——こんな光景があります。

保健所ないしは病院で処分されてしまう前に、せめて一匹でも多く飼い主をさがそうという道德的な配慮だったのでしょうか。ある動物園の広場には、不運になつた犬や猫を連れてくる家族。又新たに飼いたいという家族でにぎわっていました。大きな二

が一番興味を持っているのが、この「結合」と「集合」です。私の平面作品も集合した「点」から出来ています。立体の作品も個々の部品から組み立てられ、物と物とが結合し、集合して作品となります。ですから私の仕事はまず個々の素材選びから始まります。これが大変重要であり楽しみもあります。私の知らない人々の生活した痕跡が強く残っている家具類、昆虫のぬけがら、流木等すでに時間を使った証拠の品々。内蔵したカセットからは今の音楽が流れます。縄やとうもらこと等の種子は、これから時間を過ごすであろう未来を表現する品として。それらの個々の特性を生かしながら、ペインティングイメージをつくりあげていきます。コラージュしたりして、私的宇宙創生のイメージをつくりあげていきます。



「晩夏(バカンス)」

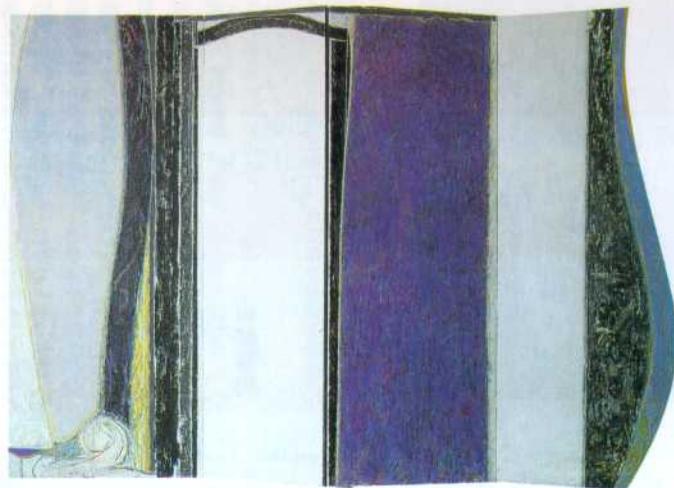
私のモチーフ——それはガラクタを捨てきれない私のストッカーからみ出してきたものなのです。「あなたの脳の中を一回割ってみたい」とげんなり顔である友だちは言いました。それは私への最高のほめ言葉です。だけど、かぶと虫を見つけた木のある場所を友だちに教える子供のように、私も、人にそう簡単には教えられないなと思います。

私のモチーフ——それはガラクタを捨てきれない私のストッカーからみ出してきたものなのです。「あなたの脳の中を一回割ってみたい」とげんなり顔である友だちは言いました。それは私への最高のほめ言葉です。だけど、かぶと虫を見つけた木のある場所を友だちに教える子供のように、私も、人にそう簡単には教えられないなと思います。

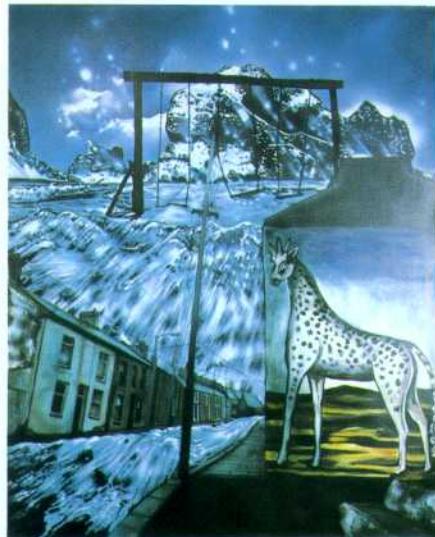
の隣の中の子犬や子猫は子供達にもうやされていましたが、ふとわきの方に目をそらすと、こちらには成長した犬や猫が一頭ずつ積み重ねられたおりの中に入れられました。純粋なシヤムだろうけど、ものすごいハスキーポイズで鳴き続けるいわるそのままのオースト。もうおっぱいがダラリたれ下り年老いた元気のないめずらはまちがいなくガス室でしょう。アウシュピツだが、「労働は自由への道」とかけられた看板のついた門をぐり抜けたところで二つに一つの運命に選別されるユダヤ人の行列が頭に浮んできました。まるでガラクタを集める趣味のように、私は多くの秩序のない無節操な記憶をクロッキーするみたいにいた門をぐり抜けたところで二つに一つの運命に選別されるユダヤ人の行列が頭に浮んできました。だが、「労働は自由への道」とかけられた看板のついた門をぐり抜けたところで二つに一つの運命に選別されるユダヤ人の行列が頭に浮んできました。純粋なシヤムだろうけど、ものすごいハスキーポイズで鳴き続けるいわるそのままのオースト。もうおっぱいがダラリたれ下り年老いた元気のないめずらはまちがいなくガス室でしょう。アウシュピツ

には成長した犬や猫が一頭ずつ積み重ねられたおりの中に入れられました。純粋なシヤムだろうけど、ものすごいハスキーポイズで鳴き続けるいわるそのままのオースト。もうおっぱいがダラリたれ下り年老いた元気のないめずらはまちがいなくガス室でしょう。アウシュピツ

には成長した犬や猫が一頭ずつ積み重ねられたおりの中に入れられました。純粋なシヤムだろうけど、ものすごいハスキーポイズで鳴き続けるいわるそのままのオースト。もうおっぱいがダラリたれ下り年老いた元気のないめずらはまちがいなくガス室でしょう。アウシュピツ



橋本一哉／Un - Titled 226×154 cm・226×164 cm(四曲二双翼風) パラフィン フレスコ アクリラ



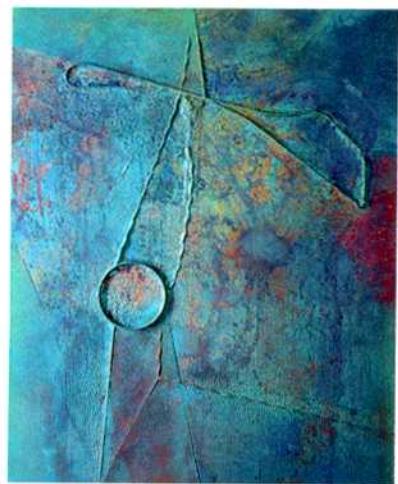
金山明子／前近代の帰宅 162×130.5 cm 生キャンバスにアクリラ



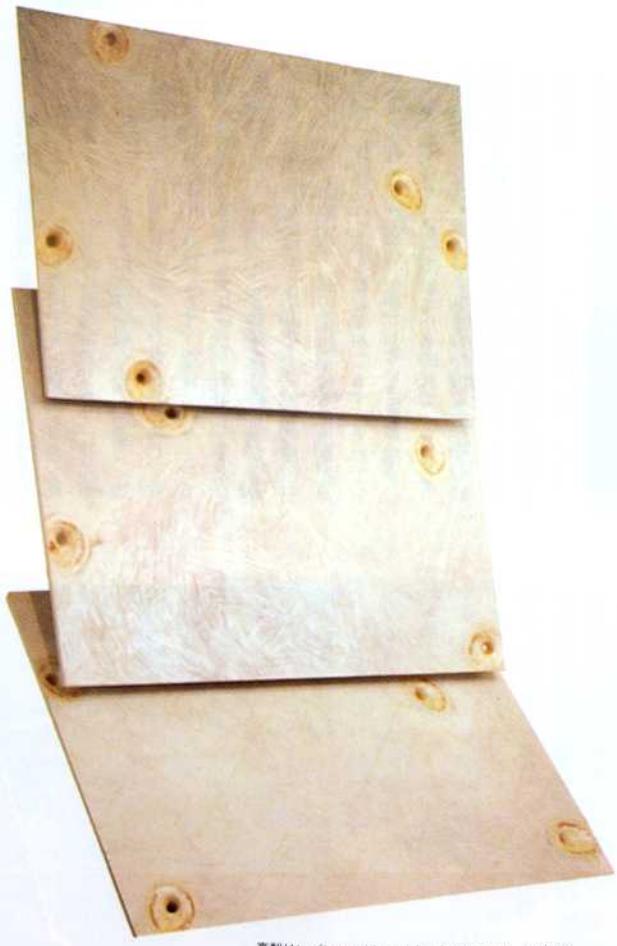
森田康雄／「Lの時間」 アクリラ 181.8×227.3cm ソリッドマーカー アクリラ オイルペンシル 方解末



植田隆雄／early in the morning 200×150 cm アルミニウム アクリラ



大久保忠春／空中庭園No.10 227.3×181.8 cm ドラム 鉄材 鋼鉄
ワイヤー 和紙 石片 海砂 油彩 アクリラ、空中庭園No.7 258.1×
181.8 cm バンバー 発泡スチロール ピアノ線 和紙 海砂 プラス
チック片 パステル 油彩 アクリラ



高製けい／le meuble sur les inclinaisons. No.1(傾斜
の上を動くもの) 300×180×80 cm 合板 木綿
ポロニア石膏 ニカワ 雪母 墓 アクリラ アルキド樹脂



柏木こう／Untitled 153×105 cm
エナメル 合板 繊布 アクリラ

遺伝子の中の美

橋本一哉

■一九六一年三重県生まれ。八六年名古屋ガスビルギャラリーで個展。八七年大学版画展に出品。私たちの持っている美意識、それは単に外界から受け取る事象で作られているのではなく、内側にある琴線に触れる事であると思う。

その琴線の調律は、風土や季候と強く結びつき、否応無しに過去の文化を引きずっていると思われる。この私達の遺伝子に刻まれ続ける。“美”とは何か、これを表現するに最も新しい素材とは何か。様々な模索を続け乍ら感性を開拓してゆく軌跡が、線となり、色となり語り始め、内側のイメージが現実空間と響きあい、空間全体で物語れるよう制作してゆきたいと思ってます。



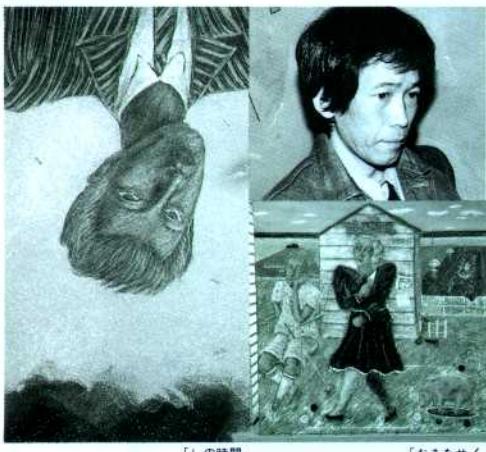
Untitled

前近代の傳家



F.ヘーコンのペラスケスによるイノセント十世の著作

アクリラを使う様になつて、材料に対して自由な気持ちを持てる様になりました。本という私の体質に合っている上に、様々な可能な媒体、顔料、方解石、ソリッドマーカー、ペンシル等の使用、組合せにより、そのたびに私自身で新鮮な思いをしてきました。私のモチーフは、いつも人間です。自分を含め、自分を取り巻く回りの人達に興味があります。特に家族には……。そしてその人達を取り巻く動物等、物に興味があります。チョットした身辺の一角に、なにげない新鮮さを、発見します。空は、広々として大好きな空間です。花も美しいし、アンティークな物達、エレクトロニクスにも親しみを感じます。それは、私の生活です。そんなモチーフが私の絵の中に自由に飛びかいます。私の今の気持ちや生活が自然に絵に表現されている様な気がします。それでいいのだと思っています。なぜ、どうして絵を描くのか。と言うより、私の生きている時代で、自分なりの空間とオリジナリティを持ちながら少しずつ展開していく絵日記の様な表現が私の絵です。次の作品は、明日の絵日記が新鮮な気持ちで創られたらと思います。



「おまたせ！」



空中庭園No12のクローズアップ 空中庭園No12

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごとくなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

現在、私は一昨年他界した画家山下菊一の画集の編集に携っています。仕事の内容はデータとなる約六〇〇点の作品を頭の中に記録することである。今まで作り手でしかなかった自分の脳に、一人の画家表は個展。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごとくなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごとくなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

大久保忠春

■一九四六年京都市生まれ。安井賞展、明日への貞象展、具象現代展、日本青年画家展、現代日本美術展、日伯現代美術展、独立展、セントラル'87展ほかに出品。独立賞、京都市新人美術家選奨受賞。個展・グループ展多数。

画家の「生」という問

金山明子

■一九四七年東京都生まれ。七三年より女流画家協会展、毎日現代美術展、同国際展ほかに出品。主な発表は個展。

明日の絵日記

森田康雄

墓洗う虚空を洗つごととなり
(上甲平谷『天地阿吽』より)

海からの贈り物

"Comment peindre, mais pas que peindre."

こうした美術をつくたり考えたりするようになつてからかれこれ十年が経ちます。やはり当初は七〇年代美術とかの影響があり、たぶんその辺が入口となつた訳です。三年から五年の「サイクルでいくつかの方法を繰り返してつくるということ」を試みてきましたが、今もなおその段階にいます。

「何を描くか、ではなく、どのように描くか」一世紀の間發せられてきたこの問いは、僕が作品をつくる時常に立ち返るところにあります。またそれは僕の制作原理になつていています。

「どのように描くか」は僕が作品をつくる時常に立ち返るところにあります。またそれは僕の制作原理になつていています。一寸古くさい問いでありますが、そこにこだわるのは、この問い合わせが發せられるようになつて以来痛快な解答は未だ得られないと思えるからです。また、絵画という表現形式に可能性が残されているとすれば、この問いを上台とした上に、取り組むべき課題があると思えるからです。



今はおもに、作品の輪郭、側面、厚み、大きさ、色、線、かたち、肌理、素材、自分の身体等、絵画を構成する諸要素と見る事との関係を考えつつ制作を試みています。

■一九五〇年大阪府生まれ。第一回～一七回日本国際美術展、第三回、四回吉原治良賞展、第一回～三回ABC&P一展、第一〇回エンバ賞美術展(受賞)に出品。個展三回。大阪泉北に壁画制作、大阪天王寺博にてパフォーマンスA→WING。

先日、買い物に出かけようと玄関を出ると、雨がボツボツ降っていました。「オーラ傘」、聞いて見ると紫色のビニール傘は骨の具合が妙にギクシャクして、精円形にありました。「大丈夫かなあ」、少し歩くうちに雨足が急に強くなつて来ました。川の土手に来たときです。風が吹いたかと思うと何かが弾ける音がし、骨だけの傘を握っていました。ぶらさがつているビニールを外し頭に被つてみたのですが、オランウータンのようです。口の中でブツブツ言いながらジャケットのフードを被り左手の骨を投げ捨ててようとしたところ、カサカサと不思議な動きをしました。ずぶぬれになりながら家へ帰り、「ありがとう、作品が一つできただよ」と言つてニヤニヤ笑ひながら立っていました。今では、そんなガラクタや小石、枝、針金……で家中が一杯です。最近、雲やエントツの煙に見とれる事が多くなつたなあと思つたら、作品もフワフワしてきました。素朴な好奇心がこころをワクワクさせます。驚きが私のエネルギーです。今でもモラトリームのままの私は、中空を漂つてゐるようです。

■一九五〇年福井県生まれ。七七年～八五年国展、東京展、八年精神の幾何学展、八四年インバクトアートエスティバルに出品。銀座絵画館(アートギャラリー)、ギャラリー山口にて個展九回。八〇年安田火災美術財団奨励賞。

旅をゆきし 跡の宿守 をれをれに
わたくしあれや 今朝は まだ来ぬ

わたくしあれや

高梨けい

私は、ひどく欲していた私は何かいうべきなが・宗教について。夜、外に出て、私は星を描いた。V.V. Gogh

旅をゆきし 跡の宿守 をれをれに
わたくしあれや 今朝は まだ来ぬ

実朝



early in the morning

early in the morning

零でない奥。母なる妹、父なる兄、——家族。

平面・擬平面・擬似平面相(特殊・一般)物でなく、概念でなく、祈りでなく、かすかな美体によつて顕現する稀なるもの、マリンスノウのよう。物質からはなれて、精神をワープして、反物質。

(10^{27} 度K - 10^{-34} 秒をKEEP、KEEP!!)

世界の不ガテイフ——反物質としての色、反物質としての形、反物質としての絵画。

(10^{27} 度K - 10^{-34} 秒をKEEP、KEEP!!)

私は、ひどく欲していた私は何かいうべきなが・宗教について。夜、外に出て、私は星を描いた。

V.V. Gogh

旅をゆきし 跡の宿守 をれをれに
わたくしあれや 今朝は まだ来ぬ



lemeuble sur les ouvertures(穴の上を動くもの)



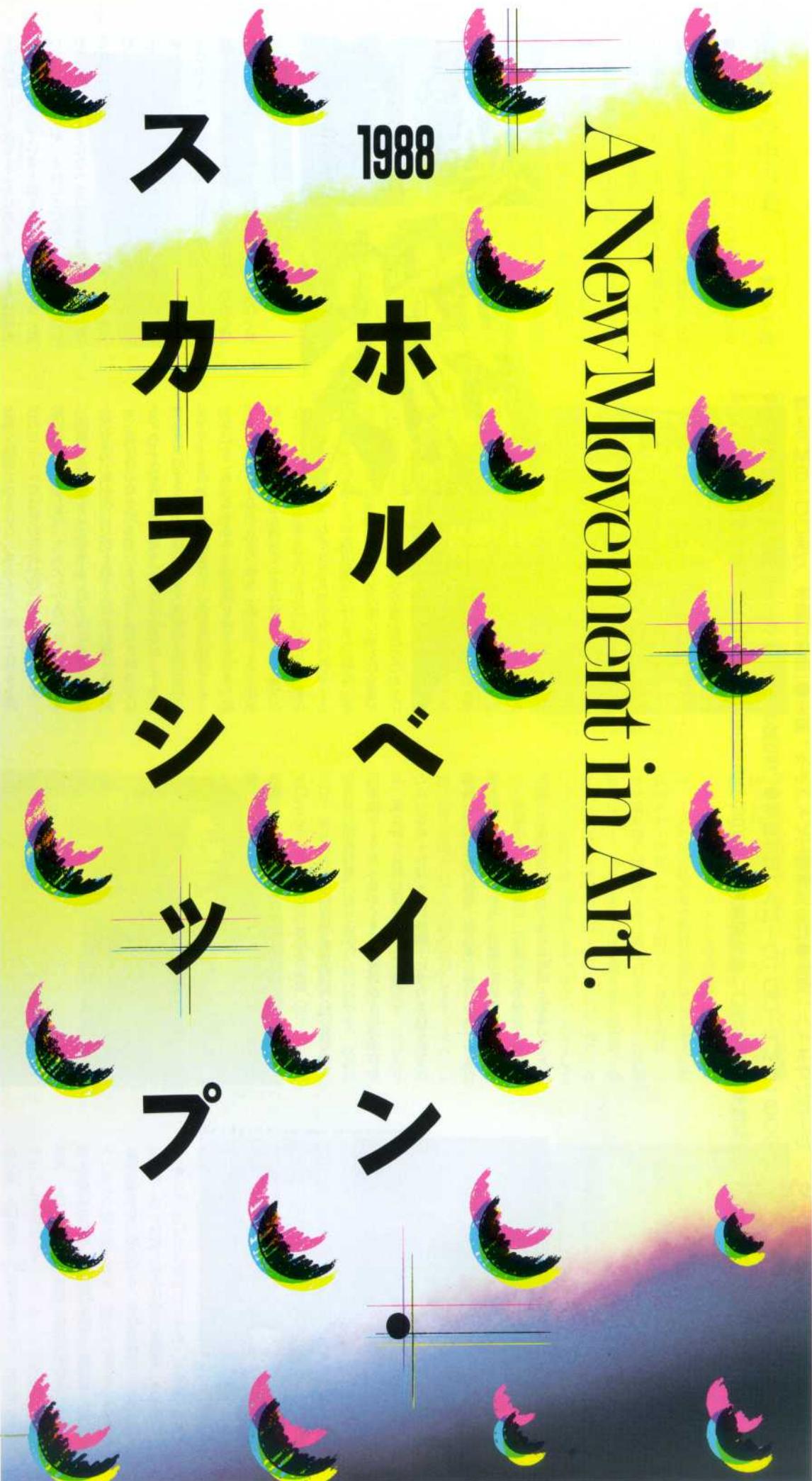
アクリラート展 ● 開催期間：6月1日～6月20日(水) ● 展覧会場：○美術館(東京都品川区大崎1-1-6-12大崎二ユーシティ・2号館2F) ● 開館時間：AM10:00～PM6:30(入館はPM6:00まで、木曜日休館) ● 主催：ホルベイン工業株式会社 ● 後援：ハイネケンビル

アクリラートの、新しい、
空間と色と造形。

A New Movement in Art.

1988

スカラ・ホルベイン・シリップ



248人目の、ホルベイン。

ホルベイン工業は新しい作家を育成するために、1986年に「アクリラ奨学制度「ホルベイン・スカラシップ」を設立。

つてアートの現在と未来に不可視の領域を切り拓いてくれる、力と可能性のある作家100名を募集します。また「アクリラート展」は、1986年ホルベイン・スカラシップの第一回受賞者114名の中から選ばれた20名の鋭いアクリラ作家たちによる作品展です。アクリラート展、スカラシップがアートに新しい潮流を起こすことができれば幸いです。・奨学制度の詳しい内容・ご応募の方法等は弊社またはボスター掲示の美術館、画廊、学校、画材店にある申込書で。締切は9月20日

■第3回 ホルベインアクリラ奨学制度

ACRYLART

発行日 昭和63年5月25日

発行所 ホルベイン工業株式会社

東大阪市上小阪1-3-20

TEL(06)723-1555

発行人 高木幸雄

この印刷物は、ホルベイン アクリラ・モニター、奨学者の通信誌です。不定期刊行のため、定期購読の受け付けは致しておりません。

holbein

ホルベイン工業株式会社

東京都墨田区東向島2丁目11番4号 03(3681-9251)

東大阪市上小阪1丁目3番20号 06(723-1555)